

[124]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2202921>

出版情報：語文研究. 124, 2017-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

高倉一紀・菱岡憲司・龍泉寺由佳 編

神道資料叢刊十四『小津久足紀行集(三)』

本書は、小津久足(号桂窓、一八〇四〜一八五八)の紀行文を紹介する『小津久足紀行集』の第三巻である。本書の構成は以下の通り。

解題

凡例

本文

さくらかさね日記

花衣日記

秋錦日記

小津久足は伊勢松坂の豪商小津新右衛門友能の三男として誕生する。通称新蔵、後に与右衛門、号桂窓。小津家は江戸店持ちの伊勢商人で、屋号は湯浅屋であった。久足は、文政五年に家督を相続し湯浅屋五代目の主人となる。商人として商いを生業とする一方で、久足には文芸や学問、旅に遊ぶ風流人・趣味人としての一面もあった。文化十四年、十四歳にして本居春庭に入門し国学を学び、また読本作家である曲亭

馬琴と交流を密にして馬琴の良き支援者の一人であった。さらに蔵書家としても知られ、松坂百足町の本宅に設けた西荘文庫には夥しい数の蔵書がある。加えて、久足は生涯旅を楽しむとしており、各地の名所・旧跡を巡り多くの紀行文を残した。本紀行集は生涯に渡って書き続けられた久足の紀行文を辿ることによって、彼の国学や馬琴との向き合い方、その変化までをも見通し、近世学芸史研究における新たな地平開拓の一助たらんとするものである。

前述したように久足は湯浅屋五代目主人という商人としての一面と、風流人・趣味人としての一面という二つの顔を持っていた。彼が子孫のために書き記したという教訓書『非なるべし』や『家の昔かたり』を見ると、商人久足の冷徹な現実主義ぶりが浮き彫りとなる。「商人の趣意」「町人の本意」として、家産の維持を何より重視した彼の現実主義は、当時の道徳規範や社会通念との対立さえも厭わなかった。しかし、それは商人の趣味的風流を否定するものでは決してなく、「遊芸は、何にてもこのむものはなすべし」とも言う。ただ、注意しなければならぬのは「自の好キは癖とみて、他におよぼすべからず」という戒めである。それ故、彼の紀行文もまた「他におよぼすこと」≡他者への影響があってはならず、不特定多数の緋読が前提となる板行がなされることはなかった。

本書所収の『桜重日記』(天保十四年)巻末には、長い張紙

の貼付があり、そこでは久足の紀行文執筆へのスタンスを伺うことが出来る。また、「解題」においては決して多くはなかった久足紀行文の読者が示される。本書を通して久足の紀行文それ自体に加えて、彼の周辺にいた人物を含んだ文化的営為に関する様々な示唆を得ることが可能となるはずである。

(平成二十九年三月 皇學館大學研究開発推進センター神道研究所 A5判 一七六頁)

大庭卓也 著

『江戸人、唐詩選に遊ぶ』

本書は、久留米大学御井図書館において催された、御井図書館貴重資料企画展「江戸人、『唐詩選』に遊ぶ」の図録である。本書の構成は以下の通り。(コラムは割愛した)

ごあいさつ

プロローグ

〈図版〉

第一章 江戸に『唐詩選』が出版される —— 原姿の復元 ——

第二章 江戸人が著した注釈書たち —— 江戸語に訳される

『唐詩選』 ——

第三章 絵本にする試み —— 中国でも実現しなかった快挙 ——

第四章 『唐詩選』のある生活 —— ささまざまな楽しみ方 ——

第五章 明治人も、大いに遊ぶ —— 現代への連続 ——
参考図版

〈特論・資料〉

和刻『唐詩選』出版の盛況

翻字・『唐詩選画本』初編

参考文献

出品・参考図版目録

久留米大学は文学部創立二十五周年を記念し、御井図書館において平成二十八年七月から十一月まで、特別企画展第一期「江戸人、『唐詩選』に遊ぶ」を催し、江戸時代における『唐詩選』受容の諸相を御井図書館収蔵資料を中心にとどり紹介した。本書は、この企画展の内容を詳しく紹介するために編まれたものである。

『唐詩選』は、明の李攀龍が編纂したとされる唐代の漢詩選集であるが、中国では早く李攀龍の名声をかりた「偽撰」とされ、重視されずになる。しかし、江戸の知識人たちは、この書を中国最新の唐詩鑑賞書として注目し、荻生徂徠は漢詩を作るときの手本集として、『唐詩選』を第一に推薦した。徂徠学の全国的な流行により、『唐詩選』の読者は一気に増加し、江戸時代後期に『唐詩選』偽撰説が周知されたのちもその人気は衰えることなく現在に至っている。今回、本書の

すべてを紹介することはできないため、その一部を取り上げることとした。

〔図版〕第二章では、江戸人による『唐詩選』の注釈書として、『唐詩選掌故』『唐詩選国字解』『唐詩選広解』が紹介される。服部南郭の没後、徂徠学派の学者たちによって、数多くの『唐詩選』の注釈書が著わされた。これら邦人による注釈書の数々は、『唐詩選』の読者が増えつつあったことを物語っており、特に、誰もが読める国字訳書の出現は、漢詩の知識に乏しい人々もまでが、『唐詩選』に注目し始めていたことを示している。

続いて第四章は、様々に楽しまれた『唐詩選』がテーマとなっている。この章では、大田南畝が『唐詩選』とその注釈書をパロディー化し、大ヒット作となった『通詩選笑知』、能書家沢田東江が『唐詩選』巻六をまるごと草体で書いた『東江先生書唐詩選』、そして、嵩山房が遊戯の具として商品化した『唐詩選かるた五言絶句』等が紹介される。

そして、〔特論〕大庭卓也「和刻『唐詩選』出版の盛況」では、江戸時代に刊行された『唐詩選』の諸版の数について、また、それらの特色と普及の様相について論じられる。この論考により、江戸人が享受した『唐詩選』の実態がより明らかなものとなった。

本書を通して、江戸時代における多様な『唐詩選』を楽しむ味わうことで、読者はさらにその豊饒な世界へと惹き込ま

れていくだろう。

（平成二十九年三月 久留米大学文学部 A4判 一二九頁）

後藤康文 著

『堤中納言物語の真相』

本書は、平安時代以降成立の短編物語集である『堤中納言物語』の読解について、既存の注釈書に拠らない徹底した本文批判と厳密な本文解釈を進めることで、本作品の革新的な読みの可能性を提言する論文集である。本書の構成は以下の通り。

凡例

まえがき

- 1 『このついで』試論——第二話の読解を手がかりとして——
- 2 『このついで』篇名由来考
- 3 観音靈驗譚としての『貝あはせ』——観音の化身、そして亡き母となった男——
- 4 『ほどほどの懸想』試論——頭中将は後悔したか——
- 5 幻惑装置としての現存本文——『逢坂越えぬ権中納言』復元——

6 『思はぬ方にとまりする少将』とどこどころ

7 『はなだの女御』の〈跋文〉を考える——『堤中納言物語』の本文批判と解釈——

8 『堤中納言物語』書名試験
初出一覧

関連論文一覧

あとがき

中古文学作品に共通する問題として、本文の書写年代が近世を遡らないため、誤写・脱字の可能性を大いに孕んでおり、読解の困難さは極めて高い。短編という形式の取っ付きやすさゆえに、そのような問題がおざりにされてきた『堤中納言』の本文は、数多の注釈書が編まれている現在でもいまだ信頼に足るテキストは存在しない。

筆者はそのような『堤中納言』研究の現状に危機意識を持ち、冒険的でありつつも堅実な注釈姿勢をもって、本文批判をおこなう。『このついで』の論考では、作中和歌にこれまでにない掛詞の存在を指摘し、篇名を「子のついで」と捉えることで本篇を「子を契機として展開する物語」であると解く。『ほとほと』の『懸想』に関する論述は、物語末尾の一文を大胆に改訂することで、従来『薫型』主人公として厭世的性格だと論じられてきた頭中将の性格を一転させ、姫君に「懸想」する男性主人公像を描き出そうと試みる。

本書は『堤中納言』の読解に新たな視座を提供し、また適格な本文批判研究の指標となる書であるといえよう。

(二〇一七年四月 武蔵野書院 四六判 二四八頁 三、〇〇〇円＋税)

木越 治 責任編集・飯倉洋一 校訂代表

江戸怪談文芸名作選 第二巻
『前期読本怪談集』

本書は、江戸時代の怪異・怪談話を集めた江戸怪談文芸名作選のうち、第二巻にあたるもので、前期読本を扱っている。本書の構成は以下の通り。

垣根草

新斎夜語

続新斎夜語

唐土の吉野

解説——飯倉洋一・有澤知世・篁田将樹

そもそも読本とは、作品中に描かれた絵を中心に〈見て〉楽しむ絵本に対し、文章を中心に〈読んで〉楽しむ本のことを総称して言う。とりわけ、文学用語として読本と言う場合、

十八世紀半ばから幕末にかけて興隆した小説様式を指し、例えば上田秋成の『雨月物語』や曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』などが現在ではよく知られている。また、中国小説からの影響を強く受け、怪異性や伝奇性の濃いことなどがその特徴として挙げられる。

この文学用語としての読本は、前期読本と後期読本に二分される。本書に収められる前期読本とは、寛延（一七四八～一七五二）から寛政（一七八九～一八〇二）の約五十年間にかけて、主に上方を中心に出版されたもので、複数の短編から一作品の成ることが多い。

本書所収の作品は、草官散人著『垣根草』、梅臈館主人（三橋成烈）著『新斎夜語』『続新斎夜語』、前川来太（伊丹屋善兵衛）著『唐土の吉野』の四篇である。

『垣根草』は、近年、都賀庭鐘作者説が再浮上しており、今後の発展が俟たれる作品であり、『新斎夜語』『続新斎夜語』は、知的な議論の応酬が話の展開と結びついている点で、『雨月物語』所収の「白峯」「仏法僧」「貧福論」といった同時代の読本作品、あるいは談義本との関係の上で論じられよう。また、『唐土の吉野』は、浮世草子に属する作品の一編をほぼそのままの形で本作品中に典拠として取り入れることから、浮世草子や前期読本といった現行文学史のジャンル区分を考え直す際のヒントとなろう。

本書巻末の解説においては、各収録作品について「1 作

者」「2 書誌」「3 内容」「4 参考文献」が要領よく記される。併せて参照されたい。

（平成二十九年七月 国書刊行会 四六判 四〇〇頁 五、四〇〇円＋税）